

松島遊行

特別
45
652
6



門 15
號 652
卷 6

門 15
號 3844
卷 6

昭和四年二月廿日
高田早苗氏贈

志
稿



奇
物
子
節

物をおぼへるが如く報を稱せざる者其は
 心をも報をせざる志をりて自ら報
 を求む者其は人たるも報を其の
 情せざる物と報を其の情せざる物
 づばかく同し其の報を其の情せざる
 事なるは出るに際して軽しとて其を
 情せざる者其は人たるも報を其の
 情せざる物と報を其の情せざる物
 なる大恩よる家なる大義成る也



ふる者も所を荷ひ大恩乾し議
ふる者も所を報ひ

奇
子
西
子

黄蒼のいふを定む振りばいよ人の親
もどるもあはれと思ふも是れ人なるも
と振むる身の時ハ子遊む時ハ
親也よ人を思ふは也いふも
バ彼が行くを促さる此がけり
り彼が鳴るを聴く此が鳴る
り彼が視るを覺る此が視る
はり彼が感るを思ふ此が感る

いふは是故疑人のい人のいあふたつるを
陰よりい人の考より陰から居子の居仁と
辨と中といふと何れも何れも何れも何れも
害のあふ

奇丘子巫像篇子巫と考も思ふべき
二階子像と設も神と考も思ふべき
なる是は疑也とも樂むも我獨
の礼也と教へて必も教へし高潔の情
母子随て父子随て凡人の痛むを
呼り父を呼り是れ乳哺の教へ虎
狼肉を喰ひる人校龍血を喰ひる
るべし人ハ喰ひる下なりこのゆゑ

しつぷりしつらん聞の興がむと報く天下
の然を敷一烈この念も敷い食の
る細子あふいり

奇兵子

悪を為者人の識ん可も畏るべきと
識者あり善と為者人の知る可も欲
ん可も正不知者あり是故子人不知
者この世も大悪とし人不知者出さをも
そあやといひ好悪を行は者思廣うべ
奇特も務るの功大なりん善博
美んる者智慧の文ある
のい名るふべし是は惟るを貴び惟

徳を以て守る能く万世不朽の行し

齊立子も云く人の闘も止む者其闘も
闘はる人の忿も抑る者其忿も
一む善闘も救者其闘も
善怒も解者其忿も清は是故子
心依るに依りて其忿も依るに依りて
乱る民理づるに依りて其忿も
愈怒む水動易して自清く民安
易して自平く其忿も万物の情も逆

ハダコトアコ

天照子母女
康正
くまの家教書
十巻行

何^{ナニ}と^ニの^ノ女^メと^シり^テ小^コ草^{クサ}堂^{ドウ}遠^{エン}宇^ウ會^{カイ}
相^{アヒ}廣^{ヒロ}榻^タの^ノ詔^{ミコトノ}子^コ非^ヒ比^ヒ東^{ヒガシ}前^{マエ}之^ノ寢^ネ
陰^{カゲ}陽^{ヨウ}中^{ナカ}子^コ壽^ス之^ノ明^{アカリ}暗^{カクレ}相^{アヒ}半^{ナハ}一^{イチ}屋^ヤ
高^{タカ}き^キと^トを^ヲと^トく^ク高^{タカ}き^キ時^{トキ}は^ハ陽^{ヨウ}盛^{セキ}り^リて^テ明^{アカリ}
多^{オホ}し^シ屋^ヤ早^{ハヤ}き^キと^トち^チり^リ年^{トシ}も^モ時^{トキ}は^ハ陰^{カゲ}
盛^{セキ}り^リて^テ暗^{カクレ}多^{オホ}し^シ故^{ユヘ}に^ニ明^{アカリ}多^{オホ}し^シは^ハ鬼^{オニ}
を^ヲ傷^{ヤブ}り^リ暗^{カクレ}多^{オホ}し^シは^ハ鬼^{オニ}も^モ傷^{ヤブ}る^ル人^{ヒト}
の^ノ魂^{タマ}は^ハ陽^{ヨウ}の^ノ中^{ナカ}に^ニ在^アり^リて^テ明^{アカリ}

暗も傷もして疾病を生ん此所謂
居所の室尚^{スミカ}古きを^カして^シ死^シし^ル也
や天地の氣有^カ光陽の肌を^カ攻^ク陰陰
の體を^カ侵^クあり^シ、^{ツツ}瘰^{ツツ}瘡^{ツツ}を^{ツツ}さ^{ツツ}る^{ツツ}也
凡そ居所の室^カ四^カ也^カ皆^カ總^カなり^シ凡
^ニ漏^ルは^シ即^チ隘^ク也^カ凡^ソ能^クは^シ即^チ圓^ク
所^ニ居^ルの^ニ室^ノ前^ニに^シ簾^ヲ、^カ後^ニは^シ屏^ヲ、^カ太
明^クを^シ即^チ簾^ヲを^シ下^ルけ^テ以^テ其^ノ内^ニ映^ル
を^シ和^シげ^テ太^ク暗^クは^シ簾^ヲを^シ捲^クて^シ以^テ

その外^ヲ知^ルを^シ通^スる^ニ内^ヲ以^テ心^ヲを^シお^スく^ニ
外^ヲ以^テ目^ヲを^シお^スく^ニ心^ヲ目^ヲ皆^ニあ^リて^シば
身^ヲお^スく^ニ明^ク暗^クを^シお^スく^ニ以^テや^シ太^ク事^ヲ
慮^ス多^クく^ニ太^ク情^ヲ欲^ス多^クく^ニ以^テ意^ヲ欲^ス多^クく^ニ
内外^ヲを^シお^スく^ニせん^ヤ

有皇子百家類
早老甘陽極

陽燧火を召方諸水も召感激
の是斯遠い人高視者は強
低視者は弱
者ば仁あり張視者は怒
は信し遠視者は智あり
外視者は昏内視者は明
是故に我も卑る者は身我を
勝る者は神に非真の念の

[Blank lined page]

奇子百家歌
丁卷廿八心要

成る

望^イ望^ウ者^モ化^レして婦人^ト考^ルり、望^ウ望^ウ者^ハ
化^レして猛虎^ト考^ルる、この望^ウ望^ウ者^ハ不^レ復^ス
ざる者^ハ其^レ故^ニ望^ウ望^ウ者^ハ其^レ
形^カ和^カ喜^ブ者^ハ其^レ形^カ度^ク怒^ル者^ハ
其^レ形^カ剛^ク憂^フ者^ハ其^レ形^カ戚^ム之^ル也
亦^レ望^ウ望^ウ者^ハ化^レして小人^ト是^レ也、由^テ六^ノ尺
の身^ヲを望^ウ望^ウ者^ハ以^テ龍蛇^ト考^ルる、以^テ
金石^ト考^ルる、以^テ草木^ト考^ルる、

を知らず

荀子百家類纂
卷廿六 韓非子

萬物之形を轉^カゆるの^ヒ一^ヒの^ノあり
由^ヨは千^チ鈞^クの^ノ埒^ニを^テ登^リる^ノの^ヒ一^ヒの^ノ
機^ノ由^ヨは一^ノ目^ノ以^テて^テ大^ノ天^ヲを^觀つ^ツく
一人^ノ以^テて^テ北^ノ民^ヲと^シて^テ君^トする^ノ一^ノの^ノ太^ノ虚^ニ也^{ナリ}
か^レと^スる^ノ漚^{アリ}あり^テ太^ノ上^ノ流^ニを^テして^テ家^ニ
あり^テ天^ノ地^ノの^ノ洞^もは^テ陰^陽の^ノ房^外
知^ルく^テ精^神の^ノ蔵^とする^ノ所^ニ教^を
以^テて^テ命^を以^テて^テ活^はす^ツく^ノ天^地以^テて

奇丘子 百家類
卷七 虚實
条

文シカ復ヘハシ

方咫の木、地上に置て、人より歩むを踏フミ一
わらば、餘あり、方尺の木、竿の端より
置て、人より歩むを踏フミ一あり、是より歩む
物、小大を置て、人より歩むを踏フミ一あり、是より歩む
あり、是より歩む、大易をも置て、人より歩むを踏フミ一
は愈熱く、炎灼をも受て、懼オソる
者、は愈痛む、人老の心に益く、物老の
性なり、小人は是より由て、水濕シやいふらむ

つく火燧カキヤハ一じいもあふ

奇兵子 百家
四下り 雅子茶

稚子影カゲも五七モチカて影カゲの考カウも兵ヒョウづもよ
とと急シヤクげ、狂夫キヤウフ像ゾウも侮ウりて像ゾウの考カウ
二侮ウるるを急シヤクげ家カを侮ウる者モノ家カ
の考カウも化カるるを急シヤクげ国クニを侮ウる者モノ
は国クニの考カウも化カるるを急シヤクげ天下テンカも
化カるものい天下テンカの考カウも化カるるを急シヤクげ
三皇サンクワンは有ユ道ダウの者モノ也其道シダウ化カる也
帝テイの徳トクなるを急シヤクげ也帝テイ有

徳の者し、其徳化して三王の仁義と
なる事、を之曰く、三王は有仁義の者
なり、其仁義化して秦漢の戦争
となる事、を之曰く、醉者の酔を負ひ
痴者の痴を瘡ひ、其勢強弱して
其病強弱し、而も及ばず、
者也。

忠告

唐の魏玄同ハ賢臣なり、同興素
が為子、諫ふと、武后の怒、遂に死
を賜ふ、或人教て曰く、后忠告は
信じ、召見もはん事、を答えて、自陳
せよ、玄同歎曰く、人殺し鬼殺
し、是の如き、此の豈、純密を告ぐ人
と、あらずや、と、別死し、就く密告し
人ハ陽に殺し、鬼ハ陰に殺人、忠告

の鬼報言人殺り異なりや

学問の善惡より先知を善
善より惡より人の才知を益んもの
学問の善惡より先知を善
くははるるものなりと云ふ
おそるるものなりと云ふ
人の物事一にさかある者の
善惡を察するものなりと云ふ
善一に善惡如何なるもの
おそるるものなりと云ふ
おそるるものなりと云ふ

有の力強くして是る事術抑子
知るまひし一愈学て愈愈一、唐
土の士大夫何ぞの科考より進み
学同やぶるものある事此も氏もそこ
なひ群を誣りし事とて今の世を
懐謙入りなげ学問みずしは
まじらつし一、莊子に儒者は詩書
を以て場とあはれし事とて詭譎な
あつとてしるはよ事詭の惡左有

水戸の藩井後大夫の教養才跡
以て其徳詭譎を詭譎しとてしとく
かひありき

衆評識

大勢ありて評識はさしをきこし
さしありての中は衆職の人の顔色
を仰ぐまの言もさして次第の者は
容易に急も出さるるのこ中
才子ありて評識も救世も既に
職の善悪を出さるるし荷担は者
ありて衆見も落つるもば大事を
評識するは衆職あり始てその筋の

評識

評

評

後人よ、われもせよ、又学者、業者、
子、入れせよ、人、見せよ、分別
一、思、
一、思、

發物の致も察知り

礎石なるは、い、雨降と急ぐ、
乱舞、
づー、
と急ぐ、
して、
人、
ま、
一、

がき家は大放埒者よきで

○言大なる者い識なく平常剛

氣まらぬ者大なる臨時臆病

唐書田張孝忠の何よ言大なりて謝澹

りのいして始と慮さるべし一^{トモ}^{ナリ}時を守り

難一云い実よ大なる者過心なく剛

情の者多くい臆病し

羨財を尋る

聚斂の吏シの勤職の役所シを權法シも
施シ諸事ヲを省略シ公財ヲを羨シ積ル
功ヲはシるヲもシ道
理ヲを以てシ在月の者覺キんハ公正忠直の
事ヲを以てシ之を理小減者ノ法ヲを以て
要事ヲを缺キ賤吏ノ給禄ヲを減シて
困窮ナるヲむル部々ニ大事ヲを過シ
盜臣ヲをかりシちんトし唐書ノ本ヲ

積金と
稱し

徳裕がけよ元和詔書に倭権酷又敬
令禁諸州、羨餘、送使とあり、
常衣がけよ男耕女織もさう、
歛て上と婿といひ同し、
儒術を
下利下以婿天子、
いふもあやう

正人の鬼非妖魔も窺と破れ

編人正本
何と破れん妖は人よ由て興つ
唐の武三思一毒を置、
人なりとて去大皆訪て
僕、往てる、
あを授て、
あの花月の妖し天毒を
考せしむ秋梁公の時の正人

徳を以て怒り報

徳を以て怒り報

怒を隠して其人を友と見たる孔子の
ことをち左丘明とていふことをいふ
怒り報り怒を以ていふこといふ怒り報り
る事ありては怒り報りいふこといふ怒り
て怒を報りいふことをいふ怒り報り
仲喜屋に一切の事をいふこといふ怒り
あの如く顔を抗て人より仰つていふ
大慈恵の心を基としていふ怒り報り

徳を降し一卒徒剛をも制し小惡ハ
大惡の妨とせしつと小惡ハ七大方よりなれ
るこもつとあへんせん人の怨をあひ
りなく天下の敵なくとす

學問の老少をいふ

司馬遷公の悔の老して習ふは老
て悔悔とより一とさぶらんさへハ前を
小學に入り十歳より大に入は古
今の通義又老て學ぶと恥ぢるは
見聞自來の宋史に七十九に始て學
む好む若しより老て苟卿ハ五十九
て好む欲儒とせるとり朝に道を
ゆて笑ふ死は不可なりと學問入る

老若の差別ある一くはり一太田學に
若も長ぜる乎一廿一歳若を志し年の
友と稱し之較れ一但来りし七十
第々之身ありし一の身も老も秋
以既に臨終の末よりくふらたりし
何と書時一高の倉書の時をくふりし
を十上田金許子買取らるるに其
好書の深切なるも志し一余今茲
弘化三年一筑六十回なる珠書を傳

さしめ未蔵の書も買取らる癖止
すなり一合のりわりの書も常ん
が下手老と釋れををせぬ可
ハお歸一或は校に一しんせを遊
山行の娛も樂しと一しんせを
山海の珠味も珍と一志年の二月
十日病床に臥して危する一あまうと
ひたりしがしりし死もやぶじ如く
の癖病ハまゝく一婦し存の五元

女子大

感る年雖^モ死^ス讀^ム書不^レ廢^セ然^レと
るもむづこけりともありあはれいあ
かきも傍人^ノあはれをこらてを聞^ク
所^ノ考とあざけり^ハ深^クむす^ク詞^ヲ談^ス
しとん

念^ハ法^モ者^ノ子^ヲ抱^カ勿^ク

世^ノを^モ法^ヲ分^リ別^スの^モ者^モ馬^カ鹿^モ者^トし^テ馬^ト
鹿^ハは^レけ^テの^通を^モこ^トに^けけ^ル一^ト也^ナ
魚^ノ瘡^者と^しあ^ルも^モ法^モ者^ノを^モ分^リ別^ス者^ト
も^も一^トし^テ外^ニは^レけ^テ空^ニは^レけ^ル也^ナ
し^も名^ヲ死^スバ^カモ^ノ二^三搦^フナ^トし^テ一^ト戒^スの^義
三^三以^テあ^リ見^ル聞^ク真^實の^思息^教教^義百^百首^ノ
え^もり^のよ^き道^ヲあ^らま^りの^にと^きり^言
を^知ら^ズび^そこ^とを^三三^三け^テと^あら^まる^事の

古今の事

世に忠臣賢人も家尊る孝子見ゆ

唐の崔圓、劔南節度副大使として、
安福山が難を聞き、城を治め、陰を以て
館宇を別収、什具を備け、玄宗の河池
に次ぎて、疏を奉りて、野子蜀土、肥穀
美次、飾侯、舞トあるや、と陳玄宗書、
有下、迄下、と曰く、世に忠臣を識る

○加持水取の儀

世に加持水と云ふは病者より其を興へ薬と
禁はる徒ありしと云ふも其の事なりとの
唐書の本徳裕の傳に高州の浮屠イシ謂
言水瘡を愈はすといふなり聖水といふ類
扶風ハヤ南ミナミ方の人オホムネ年十有二人をヤシヒ徴て
從ツク汲クしむ既行テ若モシ飲バは病者敢てツク筆シ
息イも近チカはハけハじハ危カ老ロウの人年多オホク死シん而
水ミヅ中ナカ三十サンジュウ千セン取トル者モノ他オカ汲クも益イして通

二轉鬻一互相欺誅 後者曰
數十百人李德裕 津滯 勃ていし
を捕絶 追言 音兵の 聖水あり 宋
齊の 聖火あり 皆妖祥の 奈づく 古人の
禁ふふし 請觀 奉使 令狐楚 下
て 煥寔て 以て 岳原と 絶んと ころゆ 今の
世 災水と 移るもの 尋りし 子 遷り
華 亳州の 聖水の 歎かたき 故思惟
して 歎るる づりし

不孝

不孝の三あり 後をとりて 大なりとん
とりついで 孫教育を けしあし 一身
麗を 膚の ことと ぎめりく 毀傷を
るやいし 懐一し 世を 長ま 左伝に 其
父を 折く 且子 負荷 あり 絶ふと
り 是の ありて 父の 泣き くる 歎は する
を せり せし けり とも して 父の 泣 師 近の 泣
と あり 終る とも 負荷 と して けり とも あり

あゝあゝのしとらふ糸向よりけせきり
の世やなほうかきり 上宗也のなり
と云

喧嘩

を頼の若りのとよひて喧嘩を企て良
氏をぢやせん **喧嘩** 西成改を
しとて **喧嘩** の別もあゝ **喧嘩** 口論は
備は **喧嘩** 下 **喧嘩** の出る 俗語の如く
とてくは 大争論の **喧嘩** とはさる 例少くは
金玉詞林と合言津の家臣をよめて法令を
さざい **喧嘩** 口論 **喧嘩** 信止と云ふは
肥前 **喧嘩** 陣中 **喧嘩** 上宗の師 **喧嘩**

口論停止と令^イはるに後りの沙汰ありえ其
時^イをささる^イがん^イかき^イ為^イの定^イに不^イ断^イの行
跡^イ法^イ令^イ武^イを不^イ吟^イ吟^イ子^イあき^イ振^イ子^イとの法
令^イは^イき^イど^イ其^イ制^イ法^イ喧^イ嘩^イに論^イを^イ用^イと
中^イ断^イし^イん^イま^イ法^イ外^イあ^イず^イを^イ之^イて^イ堪
忍^イせ^イよ^イと^イ教^イふ^イは^イ武^イ志^イ機^イ名^イ跡
卑^イと^イん^イ令^イ耻^イし^イあ^イき^イ忍^イん^イを^イ忍^イび^イさ^イる
づ^イと^イ忍^イぶ^イあ^イの^イ喧^イ嘩^イに^イ是^イ情^イの^イ前^イこ^イとい^イる
こ^イら^イず^イこ^イら^イあ^イき^イ肥^イ利^イの^イ一^イ矢^イこ^イ近^イ来^イ

江戸の火防下の喧嘩も厳禁しよまを
はづて町人喧嘩は仕出さぬといふ事
嚴科の衆をいふ事とせむに治世の
実断とらづ一怒り路に亂世と治世の
差別あきど一概に違つては孝は同じ
身體受膚をいふ事とせむに一教て
毀傷するに孝の始し喧嘩は論の毀
傷をけしみる孝道も令はづし

河野大
野の衣
食の事
食の事
食の事
食の事
食の事
食の事
食の事
食の事
食の事

学標

孔子曰く耕は時に鋤其はけり存り学は
は祿其中に在り今賣は競ん救は
傲は物競滞をばり成世と推移
り其獨を懐く勤学は天と
とありて身は之を名を成るる
ありて身は之を名を成るる
度保親の池亭の詔よ書卷を用て
古賢子傳ふ漢の文帝は夏作のまに

侯約を好て人臣を女びせし、唇の
白雲天の異体の所し、詩句をせし、
併法に陽にさびし、晋の七賢に異作
の如し、身朝を在とし、志に隱し、在とし、
予賢立し、過し、賢師に過し、賢友に
過し、一日三過あり、一生三學も為り、
変作人世の事、一つは過す、二つはなり、人の
師、そのもの、貴しん、先し、富ん、
と先し、文を以て、次せ、
師なき

み如び人の友、そのもの、
利を走り、淡きを以て、
みは如びと、
古人を君とし、師とし、友とし、
らんは、哀を極め、
善とし、

膽大にホ智回行方

七修類稿の孫思邈の説を引く膽
欲大而二欲小智欲圓而行欲方
ゆるる膽欲大は膽の太きまより
心欲小は心のまろしきまより
欲圓とは全して破るは行欲方
とは行正し曲まるとも俗
子男は胆を固く割る心を方より
かいたと方と割る心と固くるとる

と降す、説く

改過

論語云く過ては改るを悔ふ事なり
と云く易の益卦の象君子用富益君
子以見吾則遷有過則改傳子同
然則雷迅雷激則同然二物相
益者也君子觀凡雷相益之象而
求益於己為益之道无若見善則
遷有過則改也見善能遷則可也
盡天下之善有過能改則无過矣益

於人者无天於是

疑滞セバ一と世と推察

漢文の詩に聖人は物に疑滞セバ一と
此世と推察セバ一と物の損卦の象辭
損益益虚虚與時偕行 傳に或損
或益或及益或虚唯隨時而已過者
損之不足者益之虧者益之實者
虚之與時偕行也と云ふ又損卦の上九
子之不恒凶とある利枯の心を以て恒
子守たふは此の居たふは速と改むと云ふ

男女有別

男女有別の訓は本朝の古漢之の如く
多かりしや公家堂上たるは亦
為此ありし延暦三年七月の初
男女有別礼典所業上下之差名數
已闕頃者愚陪之輩不識礼儀
至于會身混敬之別宜加禁制
會更然よりカテ 數張因史七十九卷子
子也數取三行格十二卷より 禁断會

每之時男女混雜ト竟官符ト也ト云
く男女有別礼典群倫品類ト名
教已闕如聞カ和衷ト思ト罔不識ト礼
儀ト所司ト寬宥ト言ト之ト誨ト辱ト公ト私ト會
身男女混淆ト敗ト俗ト傷ト風ト矣ト過ト斯
甚ト也ト嚴ト禁ト斷ト勿ト訟ト更ト然ト也

皆所表アリ

此調甲乙ノ音一白キニ

丑ナリト三トノト乘ト是ト鳳ト巢ト二ト三トノト伶ト倫ト鳳
凰トノト声トヲト聞ト天ト第トヲトツトルト是ト則ト解ト右トノ
竹トヲト取トテト北トノト岩トノト名ト也ト鳳ト皇ト鳴ト第トヲトツトル
士トノト孔トアリト三ト

天第ヲツル

Blank lined area for writing on the right page.

橫笛二

七星

侍涼抄八末 二七星者用也
其長五 五

Blank lined area for writing on the left page.





